

大蔵流虎明本における未詳の「ナ」に関する一考察

—呼びかけ感動詞という解釈への異見として—

深津 周太

要旨

17世紀書写の大蔵流虎明本に存在する「ナ」の1例について、従来の見解ではこれを呼びかけの感動詞と解釈するのが一般である。ただし、同時期の他の文献を合わせても類例を見出せないことなど未詳な部分も存在し、あくまで消極的な認定が行われているにすぎない。本稿では他の呼びかけ感動詞の使用実態と照らし合わせながら、当該の「ナ」がそれらとどのような関係にあるかを実証的に提示し、呼びかけ感動詞としての解釈が困難であることを主張する。さらに統語的な条件を根拠に、間投助詞や終助詞、禁止の意味をあらわす副詞としての可能性を否定する。それを踏まえて、この「ナ」はその出現位置（文頭）からして感動詞とみなさざるを得ないが、それは積極的に他者への呼びかけの意味を持つものではないと結論づける。

1 はじめに

中世末期から近世初期の口語を反映するとされる17世紀の狂言台本には、中世期以前の資料には散見されるにとどまる感動詞の用例が、きわめて豊富に見出される。品詞論的に感動詞とされるものは、さらに意味上の分類をもって、概略、①内面的な感情の表出がそのまま声の形をとるもの、②対他的に自らの意思を示すもの、③相手から態度の表明を求められた場合の応答に用いるもの、といった3つのパターンに整理されるのが一般的である。これらは「詠嘆・呼びかけ・応答」などといった名称を与えられ、同じ感動詞でも、非対他的かつ非意図的な「詠嘆」と、対他的かつ意図的な発話である「呼びかけ・応答」というように実際の言語運用上におけるはたらきは大きく異なっている¹。

対話劇の体裁をとる狂言には、特に②のような呼びかけに用いる感動詞（以下、呼びかけ感動詞とする）に多彩な形式が用いられる。この類に属する一群は、現代語同様に、場面的条件あるいは待遇の条件など、種々の条件によって使い分けがなされる。よってそれらを体系的に整理することは、当時の待遇表現の実態を知る上でも有益であることに疑いはない。しかし、中・近世における呼びかけ感動詞の外延については、一定の見解が共有されているわけではない。ある集合を体系的に捉える場合、その構成要素の選択はもともと根本的な課題であるが、上記のように、現状ではその土壌が整っていないとはいえない。

本稿ではその一端として、大蔵流狂言台本の『虎明本』（1642/寛永19）に見られる「ナ」の1例を問題とする。この例は池田・北原（1972）の注釈において「未詳」とされながらも、一応呼びかけ感動詞としての解釈が与えられている1例である。（1）に用例を挙げ、（2）に池田・北原（1972）の注釈を引用する（以下、下線は深津による）。

（1）なみよ、さうもおりやるまひ （虎明本・岡太夫）

（2）未詳。「なあ、よく見よ、そういつまでも強情をはってはおられまい」の意か

（池田・北原 1972 : 355）

池田・北原（1972）がこの例の解釈を「未詳」という形で慎重に保留しているのは、虎明本において呼びかけ感動詞と解釈される「ナ」が、この1例に限られるためである²。すなわち

当該の「ナ」(以下、「なみよ」の「ナ」とする)は、それを呼びかけ感動詞と認める限り孤例となる。本稿では、この1例について、呼びかけ感動詞としてこれを是認すべきか否かという点を中心に、従来の解釈に対する異見を示す。この1例の解釈は、ひいては虎明本における呼びかけ感動詞の外延の認定に関わるものである。

構文的な問題として扱いたい要素については、とかく文脈によった解釈が施されがちである。実際、感動詞の解釈には方法論上困難な一面があることは否定できない。本稿では考察過程における必要に応じて、文脈についても言及する場合があるが、最低限の範囲にとどめ、本稿では関連する他の形式との関係を軸に、実証的なかたちでその価値付けを行っていききたい。

なお本稿の問題とするところは、虎明本という一テキスト内の問題であり、「なみよ」の「ナ」が、あくまで虎明本において呼びかけ感動詞と解釈しうるか否かという点である。必要に従い、他の狂言資料を援用することはあるが、「ナ」全体の共時的記述、あるいは通時の問題に属する現象に関しては、本稿の直接関与するところではない。それらは今後の発展課題である。

2 先行研究と本稿の立場

「なみよ」の「ナ」について、池田・北原(1972)が「未詳」として以来、この例に対して呼びかけ感動詞以外の解釈を与えた説を寡聞にして知らない。呼びかけ感動詞であることに従うものとしては、虎明本における「呼びかけの表現」の用法について網羅的に論じた河原(1996)がある。以下、河原(1996)の見解と、そこに見られる方法論的な問題点を明らかにしていく。

2.1 河原(1996)について

河原(1996)は、「なみよ」の「ナ」について、「解釈によっては存疑となる」と、池田・北原(1972)同様に慎重な立場を示しつつも、「な」は「なう」よりも古い形と考えられる」と推定し、これを氏の設定する「呼びかけの表現」として採用している。ここに「ナ」が「古い形」とされるのは、氏が感動詞「ナウ」の出自を助詞「ナ」に求めることに由来するものであり、この見解は先行する森田(1973)に依拠している。森田(1973)では、「ナ系の感動詞」の出自について、以下のように述べられている。

- (3) これらナ系統の感動詞(深津注:「な」「なあ」「なう」「なうなう」「なよ」を指す)は、終助詞が切りはなされて独立句をなし、文頭に立つようになったものと解釈される。とすればこれも詠嘆、念押し、呼びかけの発達過程を踏んでいることになる。

(森田 1973: 197)

森田(1973)では言及されていないことであるが、河原(1996)はさらに一步推測を進めて、終助詞「ナ」の感動詞化したものが「ナ」>「ナウ」という形態変化を起こしたものと見ていくようである³。しかし、そもそも呼びかけ感動詞「ナ」というものが存在するとして、それが呼びかけ感動詞「ナウ」より「古い形」であること自体はかなり疑問である。河原(1996)の仮説の実証は、呼びかけ表現「ナウ」の出現より古い段階の文献における「ナ」の実例に支えられて初めて可能になる。また、これが古い形ならば、虎明本の他の箇所では全て「ナウ」が使用されるにも関わらず、なぜここでそのような古い形が用いられたかが説明されねばならない。

2.2 本稿の立場

河原(1996)では形式の新旧という通時論に属する問題に触れているが、「ナ」と「ナウ」

の関係を共時的にどう捉えるかについての言及がない。しかし、「ナ」>「ナウ」という形態変化が生じたとし、それが新旧の形で併存しているとする以上、河原は両形を‘ゆれ’と捉えられていると思われる。

本稿では、「ナ」の出自に関する議論はひとまず措き、虎明本というテキストが有する傾向に基づく限りにおいて、「なみよ」の場面で呼びかけ感動詞として「ナ」が用いられることがどれほど蓋然的かという議論に焦点を当てる。

確かに文脈での整合性ということのみを考えた場合、この「ナ」を呼びかけの感動詞とすることには問題がないように思える。しかし池田・北原(1972)や河原(1996)が、一応感動詞という位置付けを与えるにとどめるのは、両者が文脈を根拠とした断定を避けたからに他ならないであろう。

3 呼びかけ感動詞としての解釈

仮に「なみよ」の「ナ」が呼びかけ感動詞の一種であるならば、その形態面での類似からも、虎明本において呼びかけ感動詞として頻繁に用いられる「ナウ」と関連する形式であることを疑ってみるのが、やはり定石であろう。その点で河原(1996)は正しい。ただし、ここではその関連付けを通時面に求めるのではなく、共時面に求めるべきである。つまり、出自を同じくするという面ではなく、両者が変異関係⁴にある可能性を考察することが必要となる。

さて、そのためには「ナウ」が呼びかけ感動詞として認定されうることが前提として示されねばならないであろう。そこで中世末期から近世初期に記された文典・辞書類を参考してみると、「ナウ」が呼びかけに用いられたことを示す記述が見られる。

- (4) Nō (なう)。Nōnō (なうなう)。Icani (いかに)。quicaxeraruca (聞かせらるるか)。
Mōxi (申し)。Yare (やれ)。

(『日本大文典』「副詞の種々なる種類と意義に就いて」呼掛 74/p291)

- (5) Icani (如何に)。Nō (なう)。Nōnō (なうなう)。Mōxi (申し)。} 呼格に。

(同「格辞について」78/p306)

- (6) Nō (なう)、Nōnō (なうなう)、Mōxi (申し)、Mono mōsō (物申さう)、quicaxeraruca?
(聞かせらるるか)、Quiquca? (聞くか) Monomō (物まう) 等は人を呼ぶ為に使ふ副詞である。
(同「格辞の構成に就いて」139v/p507)

- (7) Nō. ナウ (なう) 誰かを呼ぶ助辞。すなわち、‘もしもし’ (『邦訳日葡辞書』p468)

『日本大文典』(訳は土井邦訳本による)『日葡辞書』(同じく土井他編訳本による)の記述を掲げたが、やや降った『日本小文典』においても同様の記述がなされている⁵。これらの「ナウ」は感動詞ではなく、副詞あるいは(呼格の)助辞とされる。『日本大文典』が感動詞として扱うのは、「心中の様々な感動、例へば、喜び、悲しみ、苦しみ、恐れ、怒り、驚き、その他かかる心持を表す」ものであって(本稿の分類では①)、呼びかけや応答の感動詞は含まれない。これは記述の相違であり、「ナウ」を本稿でいう呼びかけ感動詞と認めることには、一緒に挙げられている形式と照らし合わせてみても問題ないであろう。当時、「ナウ」が呼びかけ感動詞として用いられたことは間違いない。

また、いずれの文献を通して、「ナ」を呼びかけに用いたとする記述は一切見られないことを指摘しておく⁶。

3.1 「ナ」と「ノウ」の関係

まず、素朴に字面上から両者を眺めてみた場合、「ノウ」の「ウ」を書き落としたりという、表記上のミスである可能性が想起されよう。あるいは、先述の通り両者が変異の関係にあることが仮説として立てうる。これらはいずれも共時的な価値として「ノウ」＝「ナ」であることを意味する。このことを考察するにあたって、以下の2点に注目したい。

(8) 「なみよ」の「ナ」は、「ノウ」が用いられることが期待される場面において用いられているか。

(9) 「なみよ」の「ナ」と「ノウ」は発話の頭に現れ、文を後続させる点で一致しているが、その後続文との共起関係において、何らかの差異が見出されないか。

本稿では先に、変異関係の可能性について述べる。その関係が否定されれば、「ノウ」の書き誤りである可能性も必然的に否定されることになるからである。

ところで「ナ」と「ノウ」は、字面上は1字の差異のみであるが、音としては単純に長短の対立ではない。「ノウ」はいわゆる開長音であり、「ナ」は言うまでもなく na である。果たしてそれらを、即座に形態の類似という点から結びつけて考えることはできるのであろうか。河原(1996)は「ノウ」「ノウノウ」について、

(10) 「ノー」「ノーノー」と発音されたと考えられるが、時には「ナー」「ナーナー」に近く発音された可能性もある。

と述べているが、根拠はない。むしろ [o:] への統合という方向でオ段長音の開合の区別が淘汰されていく中で、「ノウ」が「ナー」と発音された理由は積極的には考えがたい⁷、資料の上からもそのような傍証を得ることはできない。河原は「ナ」>「ノウ」の道筋を前提しているため、その過渡的段階にあるものとしてこのような可能性を提示するのであろう。しかし両者の通時的関係はきわめて怪しいことを先に述べた。従うことができない。

純粹に形態面のみの話をすれば、J.ロドリゲスの『日本大文典』は、「疑問助辞」(89v/邦訳 p340)の条下で、「ナ」と「ノウ」という両形式を、「Na (な) 又は Nō (なう)」というようにヴァリエーションとして扱っている。ただし、これらはあくまで文末の助辞としての「ナ」「ノウ」である。本稿では形式の出自の問題には触れないため、このことは今問題にする「ナ」と「ノウ」の関係に直接的には何らかかわりをもたない。ただ、この記述をあえて引いたのは、当時の日本語において Na と Nō という形態同士が変異の関係を持つことがありえたということ、可能性の問題⁸として提示するためである。

3.2 用いられる場面について

「ナ」と「ノウ」の両者が変異関係にあるならば、当然「なみよ」は「ノウ見ヨ」と置換可能なはずである。ここでは「ノウ」の使用が自然な場面を示し、当該の箇所がそれに相応しい場面であるか否かを考察する。

「なみよ」の「ナ」が用いられているのは、聾狂言「岡太夫」である。同曲内で、この例と同じ〈聾→妻〉の関係において用いられる呼びかけ感動詞は3例あり、そのいずれも「ノウ」が用いられている。以下に示す。

- (11) なふそれをくはふ (虎明本・岡太夫/聾→妻)
 (12) なふいかうむまかつた、はやうこしらへてくれさしめ (虎明本・岡太夫/聾→妻)
 (13) なふいとしの人や (虎明本・岡太夫/聾→妻)

しかし、「岡太夫」の3例のみから〈聳→妻〉の呼びかけは「ナウ」であるという一般化を導き出すのは早計である。観察の範囲を広げて、虎明本全体における〈夫→妻〉関係に用いられる呼びかけ感動詞の全例を見てみよう。

【ナウ】

- (11) なふそれをくはふ (虎明本・岡太夫／聳→妻)
 (12) なふいかうむまかつた、はやうこしらへてくれさしめ (虎明本・岡太夫／聳→妻)
 (13) なふいとしの人や (虎明本・岡太夫／聳→妻)
 (14) なふいとしの人や、こちへわたしめ (虎明本・法師が母／夫→妻)
 (15) なふいとしの人や、それほどに歌をよまれふとは夢々しらひで、方々をあるひてなぐさうだ (虎明本・箕被／夫→妻)
 (16) なふおききやるか (虎明本・今仁明／夫→妻)

【ヤイ】

- (17) 又はいかさふて、やひおのれは、さことめうとよ (虎明本・右近左近／右近)
 (18) やいおのれ、めに物見せうぞ (虎明本・河原太郎／夫→妻)
 (19) やいわおんな、やるまひぞ (虎明本・河原太郎／夫→妻)
 (20) やい、はなうるしのはけをば、どこにおいたぞ (虎明本・河原太郎／夫→妻)

このように「ナウ」と「ヤイ」の2形式が用いられている。

3.2.1 心理的条件

これらの例は、待遇面から大きく3つに分類できる。まず、(13)(14)(15)のような「いとしの人や」という明らかにプラスの心理的条件⁹が関わっている場面では「ナウ」が用いられている。一方(17)は、夫である右近が、妻が左近という男と通じていることを罵る場面であるが、ここでは「ヤイ」という形式¹⁰が用いられている。(18)(19)も、「わおんな」「おのれ」という明確な下位待遇形式を用いていることからわかるように¹¹、同様に夫が妻を罵る場面である。(20)も(18)(19)と同曲内での、妻への苛立ちを込めた呼びかけと考えられる。それ以外の、(11)(12)(16)には罵りが込められるような場面ではない。これらは「ナウ」で呼びかけられている。以上より、〈夫→妻〉への呼びかけ感動詞は、心理的条件を指標として次のように整理される。

表1 〈夫→妻〉の呼びかけ

心理的条件+	ナウ	3
心理的条件0	ナウ	3
心理的条件-	ヤイ	4

ここで改めて当該の「ナ」が用いられる場面を観察してみる。この場面では、自分に対して「くふ」の下位待遇形式「くらふ」を用いられた聳が、激昂して妻を殴りつけている場面である。そのきっかけとなるやりとりを示す。

- (21) 妻「こしゆかいとはよき酒の事、納豆をさかなにて、よきさけやくらふたか 聳「くらふたか、いや言語道断の事じや、男といふものは、箸に目鼻つけた物でもそのやうにはいはぬ、人にはつかふことばが有、くらふたか

この場面で聳は「扇ひろげ、刀にてをかくる」という所作を見せるほど激怒している。よっ

てこれは明らかに「ヤイ」が用いられてしかるべき場面であり、「ナウ」ではかえって不自然である。もとよりこれは、虎明本全体の傾向と照合させてみた場合であり、「岡太夫」という曲に登場する〈夫一妻〉は特殊な関係であった可能性を完全に否定することはできないが、そのような特殊性を積極的に支持する根拠はない。

以上のことを裏付けるために他台本を繙いてみよう。本来ならば、虎明本と同時期・同流派の台本である大蔵流『虎清本』(1646/正保3)との対象が望ましいのであるが、あいにくこれには「岡太夫」が収録されていない。そこで、同時期の台本である和泉流『狂言六義』(1645前後/寛永～正保頃)、同じく和泉流でやや時代が降る『和泉家古本』(1653～93/承応2～元禄6)、また版本として18世紀に刊行された『続狂言記』(1700/元禄13)、さらに時代は降るが、虎明本と同じ大蔵流台本である『虎寛本』(1792/寛政4)における「岡太夫」の同箇所を以下に掲げる。

(22) おとこ、はらをたてゝ、大かたおとこに、云ことばがある物じや、はしに、目はなを付ても、おとこ八男であるに、にくいやつじやト云テ、おいまわす

(狂言六義・岡太夫)

(23) まだぬかすかト云テ、肩ヲヌイテ一逼追マハシ、脇座ヘニクル時テヲキスル

(和泉家古本・岡太夫 p49)

(24) をのれ、聞かぬぞ、打つてをいたがよい

(続狂言記・岡太夫 p394)

(25) おのれにくいやつ。惣別此間あまやかいて置ばほうりやうもない。おのれさん／＼に打擲して遣らう。にくいやつ／＼／＼

(虎寛本・岡太夫・p221)

「なみよ」の部分に完全に一致する箇所はないのであるが、いずれも夫から妻に対する罵りが窺える。他台本の状況からも、やはりこの場面で呼びかけ感動詞を用いるならば、「ヤイ」が選択されるのが自然である。

3.2.2 待遇形式の対応

上述の心理的条件は、無視することができない条件ではあるが、もとより客観性を欠く点に問題がある。そこで形式的な面からも述べておきたい。「なみよ」の「ナ」が用いられる直前の台詞では、聳の妻に対する呼称として「おのれ」が用いられている点に注目する。

(26) いつものつえとりばひと、おのれがくちはこ(のイ)さよ、まだいひおる

(虎明本・岡太夫/聳→妻)

江戸前期上方の資料を用いた待遇関係の整理を行った山崎(1963)では、「おのれ」を用いる段階に対応する感動詞は「コリヤ」あるいは「ヤイ」とされ、「ナウ」は「そなた」段階、「こなた」段階、「こな様」段階に組み込まれる。ただし山崎(1963)において、虎明本は中世資料として扱われるため、この整理は虎明本以後のものを対象とする。また、その段階ではすでに「ナウ」は女性語とされているため対応は必ずしも正確ではないが、大きな相違はないと考える。このことは、先掲の(17)(18)からも証明される。

(17) 又はいかさふて、やひおのれは、さことめうとよ (虎明本・右近左近/右近)

(18) やいおのれ、めに物見せうぞ (虎明本・河原太郎/夫→妻)

以上のような待遇形式の対応関係をも考え合わせれば、当該場面ではやはり「ヤイ」が用いられる方が自然である。心理的条件による観察結果はこれと矛盾しないという点で意味を持つ。

以上のように、場面という観点から見た場合、「なみよ」の「ナ」が呼びかけ感動詞である

ならば、むしろ性質的には「ヤイ」に相当するものと考えべきであり、「ナウ」とは用法上の隔たりが存する。

3.3 後続文との共起関係について

次に、後続文との共起関係に触れる。感動詞が後続の要素と統語的關係を有することがないことは言うを俟たないが、共起しうる文に何らかの傾向が観察されることはありうるであろう。「なみよ」の「ナ」は、動詞命令形（「見ヨ」）を後続させている。命令表現について蜂谷（1998：221）は、「相手に対して強い圧迫感を与える表現である」とし、そのため「目下に対する場合でも、動詞の命令形そのままではなく、若干敬意を含む助動詞の類の命令形を添えた形にして、幾分やわらげた感じの表現にすることが多いと思われる」と述べる。実際に「ナウ」と共起する命令表現はどのようなになっているかを確認してみよう。

- (27) なふそれが誠ならば、はやうつれていて、其水をくれてわかうなひてくれさしめ
 （薬水／祖父→孫一・孫二 p149）
- (28) なふうれしがつて、おしやる事をききやれ（薬水／孫一→孫二 p150）
- (29) なふととさま、あれほどにおしやは、こらへさせられひ（乞髻／妻→舅 p621）
- (30) なふととさま、ちとあなたへおりやれや（乞髻／妻→舅 p622）
- (31) なふ、みれはそなたのまゆがながひに、けぬきがあらはおこしやれ
 （節分／鬼→女 p70）

- (32) なふ此分をおればかりもたういはれがなひ、おぬしもたしめ
 （文荷／太郎冠者→二郎冠者 p201）
- (33) なふそれははらのたつ時（に）云ふ事もおりやらしまさうが、思ふてもおみやれ
 （川上／妻→夫 p360）
- (34) なふそなたいてとめさせられひ（鈍太郎／下京の女→上京の女 p493）
- (35) なふ、こちへわたしめ（腹不立／所の者一→所の者二 p570）
- (36) なふかなしや、たすけやれ（瓜盗人／男独白 p66）
- (37) なふ^ツおきやれ（鱸包丁／伯父→甥 p211）

これらは、蜂谷（1963）の説を裏付ける結果となっている。唯一の動詞命令形がそのまま用いられた「おりやれ」は、その動詞自体に敬意が含まれることを鑑みれば「やわらげた感じの表現」として許容される。このように、「ナウ」には「なみよ」の「見ヨ」のように、動詞命令形そのものが後続することがない。一方、そのような用例は「やい」には普通に見られる。

- (38) やいよう聞け（虎明本・張蛸／果報者→太郎冠者）
- (39) やいこひ、無心といつは別の事ではなひ（虎明本・鞆猿／大名→猿引）
- (40) やい、なんぢちくる成共ようきけ（虎明本・鞆猿／猿引→猿）
- (41) やひひめ、はやうこひ（虎明本・首引／親鬼→姫鬼）
- (42) やい太郎くわじや、あかがりを題にして、ここで一首よめ
 （虎明本・鞆／主→太郎冠者）
- (43) やいここなもの、そこのけ（虎明本・連雀／女→男）

ここで見た「ナウ」と「ヤイ」の共起しうる命令表現の差異は、蜂谷（1963）の指摘とまさに一致しており¹²、相対的に待遇価値が上位である「ナウ」とは「幾分やわらげた感じ」の命令形が共起し、「ヤイ」には動詞命令形そのままを含む述語文が共起しうる¹³。したがって後続

文との関係においても、「なみよ」の「ナ」に近い振舞いを見せるのはむしろ「ヤイ」である。

3.4 呼びかけ感動詞と見る蓋然性

以上に述べてきたように、「なみよ」の「ナ」は、呼びかけ感動詞「ナウ」のヴァリエーションにあたる形式とは言いがたい。だからといって、これを「ヤイ」のヴァリエーションとするのは、形態の面で難がある。したがって、「ナ」を呼びかけの感動詞と見る以上、新たに「ナ」という呼びかけ感動詞の単位を設定する必要がある。しかしその場合、「ナ」は孤例となる。さらに、この場面で用いられるのは「ヤイ」であることが最も自然な形であろうから、なぜその場面に「ナ」が用いられたのかという疑問も生じてくる。

結局のところ、「なみよ」の「ナ」を呼びかけ感動詞とする解釈を支えるのは文脈のみであって、これを呼びかけ感動詞とみなすことの蓋然性はきわめて低いと考えざるを得ない。「なみよ」の「ナ」が呼びかけ感動詞「ナウ」の「ウ」をその表記の段階において脱落させた、筆録者（虎明）による筆のスリップでないことも同時に明らかである。

さて、小論の中心的な課題は、「なみよ」の「ナ」を呼びかけ感動詞と認めうるか否かというものであって、ここまでの議論において、それを認めることの困難を示してきた。すなわち筆者は、従来の解釈には従わない方向をとる。そこで次に問題となるのが、この「ナ」が呼びかけ感動詞でないのであれば、どのような要素と考えるのがよいかという問題である。この問題には、それぞれの形式の出自の問題など通時的側面からの検討も不可欠であり、小論のような虎明本のみを対象とした共時的視野から提示できることは限られているが、あくまでその範囲から一応の見通しを立てておくこととしたい。

4 間投助詞・終助詞「ナ」

さて、「なみよ」の「ナ」が呼びかけ感動詞に属しないとすれば、まず考えるべきは同形態の要素であろう。ここでは助詞「ナ」について触れるが、北原保雄他による虎明本の索引¹⁴（以下、索引）において、文節末に位置するものを間投助詞「ナ」、文末に位置するものを終助詞「ナ」という形で、その出現位置によってこれらを分類して整理している。

4.1 虎明本における間投助詞「ナ」

以下に、索引で間投助詞とされるもの全例を掲示する。

- (44) 又あ**の**ぶすは、風にあたつてもめつきやくすると仰られてござる程に、あ**の**ぶすをくふて**し**のふと申て**な** (虎明本・附子)
- (45) うつてきかせう、是をしやみせんにして**な** (虎明本・昆布売)
- (46) いかにもうきにうひて**な**、はあこぶめ**せ** (虎明本・昆布売)
- (47) やいあ**の**まがりたる所を、**な**、ひつきりて、ちやうすのひき木にしたひ**な** (虎明本・萩大名)
- (48) すこしこらへてまで (エイ) いやいはる／＼とあれへまいりて**な**、うちのていをきゝいたれば、花ごはいかにもあづきなさそうにしてこうたで**な** (虎明本・花子)
- (49) まづ／＼さゝをまいれといふて**な**、かいでのやうなうつくしひ手にて (虎明本・花子)
- (50) 目をかけておつかやれといふた程に**な**、満足してとれ (虎明本・花子)

(51) につことわらふたかほを見たればな、あゝしほらしさ、てんもくほどなゑくぼが、両のほに、七八十百ばかりいつて、ようあらしほらしやと思ふて (虎明本・枕物狂)

(52) きたいな、(おどる) きたいはうにな、ふしやうばうよ、ふしやばうにな
(虎明本・名取川／舞)

(53) 其間たゞは何とてもなあらふずぞ (虎明本・鱸包丁)

(54) 花子はひとりこうたでな (虎明本・座禅)

(55) 花子のやさしひ、まだ夜もふかひほどにおくらふと云てな (虎明本・座禅)

同形式であるにも関わらず、「なみよ」の「ナ」が間投助詞と認められないのは、それが文頭に現れるという統語的な条件による。索引は文節末の「ナ」を間投助詞と見ることの一貫しており、この整理は品詞論的な整理としては妥当であろう。

4.2 終助詞「ナ」としての可能性

文末に位置するものが終助詞である以上、「なみよ」の「ナ」を終助詞とすることは理論上不可能である。ここで逆に、「なみよ」の「ナ」が文頭である可能性を疑ってみよう。「なみよ」の「ナ」の箇所を前後の文脈も合わせて抜き出して、確認してみたい。

(56) 妻「おんなにむかひて、それはなんとした事ぞ 聳「なんとした事ぞ ((「あふぎとりたゝく、つゞけさまたゝひて、てをうけるをたゝく)) 聳「なみよ、さうもりやるまひ (虎明本・岡太夫)

(())内はト書きであり、仮に「なんとした事ぞ」と「なみよ」が、聳による連続した発話である可能性を考えてみよう。虎明本には「きかうぞな」という例がある¹⁵ことから、「なんとした事ぞな、みよ」という切れ方を想定すれば、形態的には終助詞と見することも可能である。しかし、(56)の通り、「なんとした事ぞ」は、直前の妻の台詞の引用であることから文脈上の困難がある。また、たとえ「ぞな」という文末の形式が想定できたとしても、両者は前接要素が動詞／名詞という点でも異なっており、妥当性を欠く。図1の通り、影印で見てもやはりここは2文であると見るのが穏当である。「なみよ」は文頭と判断せざるを得ない。

結局、統語的な面から、発話の頭に位置する「なみよ」の「ナ」を間投助詞や終助詞とすることは不可能なのである。

図 1



5 副詞「ナ」

(57)の例に注目されたい。これは一見、「なみよ」の「ナ」と同じ用例であるように見受けられる。なお、この2つの「ナ」は、台詞の右傍に小字で付されたものである(次頁・図2参照)。

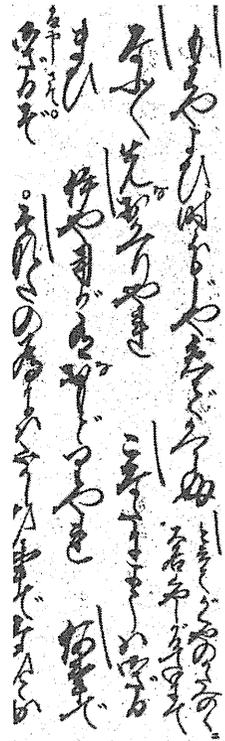
(57) 大名「なふ／＼先なおかへりやれ 入間「あなたによるは御ざるまひ 大名「いや用有なおもどりやれ (虎明本・入間川／255)

『時代別国語大辞典・室町時代編』はこのうち後者の「ナ」のみを、「相手に呼びかけて、注意をうながす声」の用例として挙げている。確かに、命令形と共起する点で「ナウ」と一致しており、かつその命令形が「オーヤレ」という形態をとることは「ナウ」にも見られた特徴

であった(用例(31)(33)(37)参照)。「ナ」は[ナーソ]と、それを修飾する句末に助詞「ソ」を要求する陳述副詞であると理解されるが、このように、助詞「ソ」を伴わない[ナーφ]という禁止の表現が虎明本に存在するのであれば、「なみよ」の場合も同じように捉えることも可能。形式を重んずる立場からは、これらを類例として処理したいところである。

しかし、この解釈には問題がある。大名狂言「入間川」は、登場人物である大名と入間の何某が、「入間様」すなわち逆言葉で会話を行う曲である。この場面では、大名が入間の何某に、「しんずるでもござらぬ(差し上げはしない⇔差し上げる)」と逆のことを言いながら刀や小袖を与え、それに対して入間の何某は喜び、「そつともうれしう御ざらぬ(少しも嬉しくない⇔とても嬉しい)」とやはり逆言葉で返す。そしてそのまま去ろうとする入間の何某に対して、大名が「なおかえりやれ」「なおもどりやれ」と言う。一見これは、引き止めるために呼びかけているように見えるが、その解釈では明らかな矛盾が生ずる。大名は刀や小袖を本気で与える気はないため、入間の何某を引き止めている。よってここは池田・北原(1972)が解釈する通り、「(帰って/戻って)来い」を逆言葉で言っているのであり、禁止表現が用いられなければおかしい。よってこの「ナ」は副詞の「ナ」と捉えるべき。このことは他台本の該当箇所を引けば、ただちに明らかとなろう。以下に虎寛本の当該箇所を示す。

図2



(58)まづおじやれと云テ、よびかへして、なにもかも、しんじたがうれしいかと云

(天理本・入間川)

(59)イヤ、夫が無いに依ての事じや。先こちへおりやるな

(虎寛本・入間川)

天理本では「おじやれ」、虎寛本では「おりやるな」となっており、これらは一見矛盾するように見える。しかし日葡辞書によれば、「来る」の意味をもつ「おりやる」¹⁶⁾に対し、「おじやる」は「行く/来る」いずれの意味も持つ¹⁷⁾ため、天理本では「おじやれ→行け」、虎寛本では「おりやるな→(戻って)来るな」であると解される。いずれにせよ、「(戻って)来い」の逆言葉と見てよい。天理本は解釈次第ともいえるが¹⁸⁾、虎明本と同流派の虎寛本では明らかに禁止表現となっていることだけでも傍証として十分であろう。

ところで、虎明本の「おかえりやれ」「おもりやれ」に付された「ナ」が小字で記されることには、どのような意味があるだろうか。江戸期の資料においては、『浮世風呂』などのように感動詞の類を小字で示すことはめずらしいことではないが、虎明本にはそのような表記態度は見られない。ここで「ナ」が小字表記されたことにはやはり、それなりの理由があったと思しい。また、これを禁止の「ナ」と考える以上、やはり[ナーソ]の呼応をとらないことは問題としないわけにはいかない。少なくとも虎明本の中で、そのような破格の用例は見当たらない¹⁹⁾。この2例を除く虎明本に見られる副詞「ナ」は70例存在するが、その全てが[ナーソ]の形態をとる。一部の例を挙げる。

(60)なかくひそ、夜前みが所へかなほうしがきてゆふたぞ

(虎明本・富士松)

(61)やれそれは物きれじや、あぶなひ事をなしそ

(虎明本・昆布壳)

(62)にくひ事をないひおつそ

(虎明本・薬水)

ちなみに、日葡辞書にも「Na···so」の形で掲出されることを指摘しておく。

「おかえりやれ」「おもどりやれ」を正しいものと見るのであれば、この場面においては、必ずしも逆言葉を用いなくてもよかったと考えねばならない。しかし、そのために「ナ」を消極的な形でのみ記すにとどめたということは誰いがたい。他台本を見ても、この場面だけそのようなスタイルの自由さが存することはやはり考えにくい。またこの解釈では、[ナーソ]の形態をとらない理由が説明されない。

筆者は、これを虎明が誤記し、それを修正した結果生じたものと見る。虎明はこの部分だけ、登場人物に逆言葉を使わせることを忘れたのではないか²⁰。その後筆を進めてから、「おもどりやれ」「おかえりやれ」では文脈上おかしく、ここでは逆言葉を用い禁止にしなければならないことに気づいた虎明は、ここに「ナ」という「禁止」のマーカを書き加えることで、この文全体を禁止文に修正したのである。ではなぜ文末に「ソ」を挿入しなかったかというに、それはもとより、「なおもどりやれそ」「なおかえりやれそ」という表現は、文法的に存在しないからである。[ナーソ]の間に挟まれるのは、一般的に動詞連用形もしくはその音便形であり²¹、虎明本でも大体それに即している。この場合、禁止の表現としては「なもどりそ／なおもどりやつそ」「なかえりそ／なおかえりやつそ」のような形が期待されるのであって、「おもどりやれ」「おかえりやれ」をその形に修正するには、いくつかの手順を踏まねばならない。

- (63) おかえりやれ → ナおかえりや^ッれソ／ナ^ッおかえり~~や~~れソ
 おもどりやれ → ナおもどりや^ッれソ／ナ^ッおもどり~~や~~れソ
 ※ カタカナは挿入するものを表す

正しく禁止表現に修正するには、文末に「ソ」を小字で付すだけでは不十分であり、この一文全体を書き換えるほかない。しかし図2のように、行間にもさほどスペースがない中で、そのような改編を行うことは困難である。そこで虎明は文頭に「ナ」の一字を記すことで、この文全体の禁止の意味を表したのではないか。

このように考えてくると、「ナ」が小字で付された理由と、この禁止であるべき一文が[ナーソ]ではなく[ナーφ]という破格の構文となっていることの説明が同時につきうる。だとすれば、ここでも本来的には「な(お)もどり(やつ)そ」「な(お)かえり(やつ)そ」が期待され、[ナ+命令形]という形は、偶然生じた見かけ上の事実にすぎない。よって、これらの2例を「なみよ」の類例と位置づけることは不可能である。さらに、ここまでの議論により[ナーφ]という禁止の表現自体否定されるので、「なみよ」の「ナ」を否定の「ナ」と見ることの蓋然性はほとんどない。

6 非呼びかけ感動詞「ナ」

ここまで「なみよ」の「ナ」について、従来言われている呼びかけ感動詞に加え、助詞、副詞としての可能性を探ってきたが、いずれの場合も解釈上の問題が存する。そこでこの1例に対して、もう一つの解釈を示しておく。禁止の「ナ」としての解釈が不可能である以上、「なみよ」の「ナ」は、その出現位置から感動詞と見るほかない。しかし呼びかけ感動詞としての可能性はすでに消極的な形ながら否定されているから、残されるのは、<積極的に他者への呼びかけを表さない感動詞>という可能性である。例えば、次の例を参照されたい。

- (46) いかにもうきにうひてな、はあこぶめせ (虎明本・こぶうり／上288)

この「はあ」は特に何らかの具体的意味を有しているわけではない。「なみよ」の「ナ」もこのような感動詞の一種と見ることができるのではないか。そのように考えれば、「ヤイ」が

用いられることが期待される場面で「なみよ」の「ナ」が用いられたことの説明がつくであろう。それ自体は具体的意味を有しないのであるから、文脈上も問題とならない。

これを非呼びかけ感動詞と見たところで、この1例が孤例であることに変わりはない。非呼びかけ感動詞としての「ナ」の他例も虎明本には見られないのである。しかし、統語的側面・意味的側面の両面において矛盾がないという点で、もっとも蓋然性が高そうなのはこの解釈ではないか。

7 結論

本稿では、従来未詳とされていた「なみよ」の「ナ」という例について、文脈に判断基準を置かない解釈を試みてきた。意味論的な記述を行う場合、定石としては全用例からの帰納という方法をとるべきである。しかし「なみよ」と同様の用例が見当たらない以上、消去法による消極的解釈とならざるを得ない。従来の呼びかけ感動詞としての解釈については、完全に否定はしえないものの、その場面における使用の相応しさという点からその蓋然性が乏しいことを指摘した。また文法機能を異にする助詞「ナ」との関係はその統語的条件によって否定される。禁止の意味を表す副詞「ナ」には、一見「なみよ」の「ナ」と形式面で一致する用例が見られた。しかしそれらを精査することで、逆に、虎明本における副詞「ナ」は、[ナース]といった助詞「ソ」との呼応を見せる用例しか存在しないことが明らかとなり、その傾向に反する「なみよ」の「ナ」が副詞の例である可能性はほぼ断たれる。

よって結局のところ、「なみよ」の「ナ」はその出現位置から感動詞と見なさざるを得ないが、必ずしもそれを従来の解釈のような呼びかけ感動詞とする理由はない。本稿ではそれを非呼びかけ感動詞とし、見かけ上のみ呼びかけ感動詞のように映ることを指摘した。よって本稿の一応の帰結としては、「なみよ」の「ナ」は感動詞の一種であるが、それは積極的に他者への呼びかけを示すものではないというものである。

ただし、本稿の中心的課題が「なみよ」の「ナ」に対する従前の解釈を修正する必要性を指摘することであり、虎明本という狭い範囲のみでこの問題を扱ったこともあって、実際に「どのように位置付けるか」という問題に関しては、見通しを述べたに過ぎず、考察が不十分な点も多い。これについては、より広い範囲の文献に「なみよ」の「ナ」の類例を求めることや、本稿では一度考慮の外においた呼びかけ感動詞「ナウ」などの形式との共時的・通時的関係の把握が不可避である。また、「ナ」という形式を統一的に捉える視点から、それ全体を記述していく必要がある。従来品詞論的な分類において、句末のものは間投助詞、文末のものは終助詞とされ、そして本稿では発話の先頭に位置する1例を非呼びかけ感動詞と見たが、これらの「ナ」は果たして本質的に異なるものであるかは疑問である。以上を今後の課題とし、それと併せて本稿の結論についても、改めて批判的に検討していきたい。

注

- ¹ 感動詞の整理は、どの観点から分類するかによって大きく異なる。これについては基準が定まっておらず問題があるが、本稿ではここに述べた3つの分類に従う。本稿で扱う呼びかけに用いる感動詞は、結果的にここで挙げた②と一致するためである。
- ² 『時代別国語大辞典・室町時代編』は他の1例を挙げているが、この例は禁止の意味を示す副詞の「ナ」と考えるべきであり、呼びかけ感動詞と捉えるには問題がある。詳しくは5で述べる。
- ³ 明言はされていないが、「ナ」を「ナウ」の「古い形」としていることから、そのように判断される。
- ⁴ 独立要素である感動詞が、環境によって形態の変化を被る可能性は低いから、ここは自由変異と考えてよいであろう。
- ⁵ 「名詞と基本代名詞の曲用について」の条下に、「Icani (いかに)、Nō (なう) この二つは呼格形を作る機能を持つ。しかしこの小辞は用いないのが通例である。」(訳は岩波文庫『日本語小文典』(池上岑夫訳)による)とある。
- ⁶ 文末の助辞として取り上げられるのみ。河原(1996)の「ナ」>「ナウ」という仮説は、この点からも疑問視される。
- ⁷ 河原はカナ書きしているため確かではないが、おそらく「ナー」は[na:]を表したものであろう。
- ⁸ あくまで可能性にすぎない。ここでは、同時期に同じ形態同士の変異関係が存在することを事実として述べたにすぎず、それに積極的な意味は与えない。
- ⁹ 心理的条件という論の立て方には様々な問題があろうが、後述の待遇形式の呼応とも併せて、そのように見て矛盾がないことを重要視したい。よって本稿では心理的条件ということに対して厳密な規定は設けていない。ただし、狂言においては一定の関係において様々な待遇形式が用いられることがあり(例えば「そなた」―「おのれ」)、罵りを含むことの解釈には、そうした形式の交替を参考にした。このような作業に際して、山崎(1963)の整理はきわめて有益である。
- ¹⁰ 日葡辞書 807r 「Yai. ヤイ (やい) 子どもや奉公人に話しかけるのに時おり用いる感動詞」。
- ¹¹ 山崎(1963)によれば、近世前期上方の待遇表現体系は「お前段階、こなた段階、そなた段階、そち段階、おのれ段階」の5段階に整理され、感動詞「ヤイ」は「そち段階」「おのれ段階」に属する(共起関係にある)とされる。
- ¹² この蜂谷(1998)の指摘は重要なものであるが、「思われる」という表現が用いられるように、感覚的な見解の域を脱していない。このことは、実例の調査によってある程度一般化しうるものと考えられ、本稿の結果はそれに対する傍証の一つとなる。ただ、あくまでこれは原則的なものでなく、待遇表現の一部と見てよかるう。
- ¹³ 「ナウ」が「ヤイ」よりも高い待遇価値を持つことに関しては、虎明本全体の用例の分布から帰納的に明示できるが、ここでは便宜的に『日葡辞書』の記述を示すにとどめる)。
- ¹⁴ 北原保雄他編『大蔵虎明本 狂言集総索引 1~8』(武蔵野書院)による。
- ¹⁵ 「鼻取相撲」の1例。
- ¹⁶ 日葡辞書 717r 「Voriari, ru, atta. オリヤリ,ル,ツタ (おりやり,る,つた) 有る,来る,〔…の状態,位置〕にある.」。
- ¹⁷ 日葡辞書 704r 「Vogiari, u, atta. オチャリ,ル,ツタ (おちやり,る,つた) 行く,来る,居る.」。
- ¹⁸ しかし、各台本の状況、文脈から考えて、この解釈は妥当なものであろう。
- ¹⁹ 抄物資料を用いて室町末期の言語を考察した湯澤(1929: 294,295)には、ごく稀に存在するものとして、「ナ」の省略例が挙げられているが、「ソ」が省略される例は挙げられていない。以下に、湯澤(1929: 295)に挙げられている例を引用する。下線は深津による。
・カマイテ人ニ見セソ、チ(汝)ト我トバカリ見フス(蒙求、六、十四ウ)
- ²⁰ ここで「忘れた」という表現を用いたのは、この2例がきわめて近い位置で連続しているためである。これらが離れた位置に存していれば、見方は異なってくる。
- ²¹ 室町時代頃から、[ナーソ]の間に挟まれる動詞連用形の促音便化が見られる。虎明本の「ぬし」という曲内に「おでやる」の禁止表現として、「此春はてられたと云た程に、なおでやつそ」と見られるため、「おかえりやれ」「おもどりやれ」の禁止表現は「おかえりやつそ」「おもどりやつそ」となると判断した。

使用テキスト

- | | |
|-----------|---|
| 虎明本 | 大蔵彌太郎編『大蔵家伝之書 古本能狂言』(臨川書店) |
| 虎寛本 | 笹野堅(1942~1945)『大蔵虎寛本能狂言上・中・下』(岩波文庫) |
| 狂言六義(天理本) | 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会(1975~1976)『天理図書館善本叢書 狂言六義上・下・抜書』(八木書店) |
| 和泉家古本 | 藝能史研究会編(1975)「和泉家古本『六義』」『日本庶民文化資料集成 第4巻 狂言』(三一書房) |
| 続狂言記 | 北原保雄・大倉浩(1997)『狂言記外五十番の研究』(勉誠社) |

参考文献

- 北原保雄・池田廣司（1972～1983）『大蔵流虎明本狂言集の研究上・中・下』（表現社）
河原修一（1996）「室町時代談話語の研究（Ⅱ）一呼びかけの表現一」『島根女子短期大学紀要』34
蜂谷清人（1998）『狂言の国語史的研究—流動の諸相—』（明治書院）
森田良行（1972）「感動詞の変遷」『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』（明治書院）
山崎久之（1963）『国語待遇表現体系の研究』（武蔵野書院）
湯澤幸吉郎（1929）『室町時代言語の研究』（風間書房）

（ふかつ しゅうた／日本語学）